

# 隨泉寺寺報

平成28年（2016年） 1月号 第545号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

## 御正忌報恩講法要

講師 住職 自修

### 講題 『浄土真宗の教え』

#### ■ 新年明けましておめでとうございます。

年齢と同じ数の新年を迎えても雑煮（ぞうに）やおせち料理が食前を飾り、お年玉が行き交う様子は感慨深いものがあります。とは言え、近年お節料理の中身はといえば、かなり変化も見られるようになりましたが……。



お節料理の起源を探ると、ハレ（お祝いの日）をお祝いするのと、主婦を休ませるために、日持ちの長い献立を重箱に詰め合わせたという、主に二つの意味があったようです。皆さんのおうちのおせちはどのようなものですか？

また、1月16日の親鸞聖人の御命日であるおたんや（逮夜）の時は煮込め（にごめ）をたべます。にごめは八寸（はっすん）に小豆を入れたものです。だんだん煮込めを作らないとか知らないお家が増えてきたので、寂しく思います。

### 1月の法座予定

- 1月 6日……………本部役員会
- 1月10日……………掃除 平原東
- 1月15日朝席午前10時より……………御正忌報恩講 御伝鈔拝読おとき
- 1月15日昼席午後1時より……………御正忌報恩講 御俗鈔拝読
- 1月15日昼席終了後……………門信徒会新年互礼会
- 2月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話— 1月

## 「手に合わない厄介な我的心を如来の大きな御手にお渡しする」（甲斐和里子）



最近、いのちにかかわる深刻、悲惨な事件が続きます。日本人は、内部から壊れてきたのではないかと心配をいたしますが、それについて、政治家が、からかい半分の発言や、はぐらかしをしているのは、なんともやりきれません。

事件の原因理由という意味ではありませんが、世の中の動きが、人間の対応能力を超えてきたことを感じます。政治経済は科学技術を駆使して、人間の欲望を煽り立てていますが、我が身が付いていかないのです。かつては、自分の体を使い、人間同士、動物植物の繋がりの中に、物事を一つ一つ感じ取り、身に付けました。今、情報だけが、先走っています。もう一度、大地に支えられた人間、限りないいのちに包まれた我が身であることを、体験として、取り戻したいものです。

南無阿弥陀仏とお念仏申す時、脆く危ういいのちであることと共に、如来の光を受けて、輝くいのちの尊さを思います。皆様が、お念仏申しながら、ご奉仕を下されることは、心と体の調和のとれた活動で、まことに大切な意味をもっていると思います。少しずつ、世の中へ拡げて下されることを期待いたしております。



## ☆新年互礼会と絵画個展



例年のごとく新年互礼会を昼席終了後開きます。また今年は長者原東の椿谷通俊さんの絵画の個展を開きます。永年書き溜められた素晴らしい油絵を鑑賞してください。

## 『今から始まる新しい「きょう」1日』



私は、今、長女が三歳の秋、お医者さまから「お気の毒ですが、この病気は百人中九十九人は助からぬといわれているものです。もう今夜一晩よう請け合いません」といわれた晩のことを思い出しております。

脈を握っていると脈がわからなくなってしまう。いよいよ別れのときかと思っていると、ピクピクッと動いてくれます。やれやれと思う間もなく脈が消えていきます。体中から血の引いていく思いで、幼い子どもの脈を握りしめると、かすかに脈が戻ってくれるのです。このようにして、夜半十二時を知らせる柱時計の音を聞いた感激。「ああ、とうとうきょう一日、親と子が共に生きさせていただくことができた。でも、今から始まる新しいきょうは？」と思ったあの思い。「ああ、きょうも親子で生きさせていただくことができた」「ああ、きょうも共に生きさせていただけました」というよろこびを重ねて、とうとう新しい年を迎えさせていただくことができた日の感激。

## ☆ 年頭のあいさつ

## 随泉寺責任役員 松井 邦雄

慈光照護の元、随泉寺門信徒の皆様におかれましては、ますますご健勝にて新年を迎えられたことと、お喜び申し上げます。

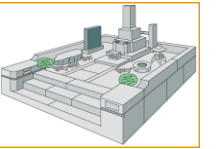


去年は「広島 被爆70年」のふしめにあたり、7月3日・4日に専如御門主様ご親修のもと、『平和を願う法要』が広島平和公園と広島別院において行われました。7月3日は平和公園に、広島別院関係の御門徒・僧侶の約1000人が参集なさいました。7月4日は広島別院に約1800人が参集なさい、御門主のご親教『過去の悲しい歴史を繰り返さないため、非戦・平和への願いをさらに強く訴えることが必要』とのお諭しを頂きました。私は二日間にわたり参加いたしました、感動いたしました。

専如御門主様には、初めての大きな行事であったとお聞きいたしました。親鸞聖人の『世の中安穏なれ 仏法ひろまれ』のご遺訓を大切に致したいと存じます。随泉寺門信徒の皆様には、本年もご協力・ご指導の程よろしくお願い致します。

## 『家を継ぐ・墓を守るということ』

家を継ぐとか、お墓を守るということが難しい時代になりました。御門徒のおうちでもこの後どうされるのだろうかと思うことがよくあります。



家を継ぐということは、どういうことなのでしょう  
つぐという字は、  
継ぐ・嗣(つ)ぐ・承(つ)ぐ・次ぐ・接ぐ・告ぐ・注ぐ等々あります。

- ① つぐ【継ぐ・接ぐ】結び合わせたり、足したりして、一続きのものとする。⑦ つなぎ合わせる。① つぎ木をする。⑦ 衣類の破れをつくろう。⑤ 絶えないうちに、減ったところに足す。補給する。④ 前の物事が断絶しないよう前に続けて行う。
- ② つぐ【嗣(つ)ぐ】なくなった人のあとをつぐ。家系や家業を相続する。
- ③ つぐ【注ぐ】容器に物を満たす。特に、液体を容器にそそぎ入れる。
- ④ つぐ【承ぐ】両手で上にささげてうける。引き継ぐ。うけ継ぐ。  
相手の意にそって、引きうける。うけたまわる
- ⑤ つぐ【告ぐ】伝える。知らせる。
- ⑥ つぐ【次ぐ・垂ぐ】あとに続く。連続する
- ⑦ つぐ【接ぐ】離れているものをつなぐ。



こうしてみるとつぐということは、単にモノや土地だけを引き継ぐということではないようです。

家を継ぐというのは物理的な家・土地などの不動産を引き継ぐことを意味するものではありません。そういった不動産は時代の流れとか社会の環境変化の影響を受けてたえず変遷します。

一方、その家系の血筋が引き継いだ「思想」(価値観とかものの考え方)は、ある方向性を示しています。いわばそのお家が累代に渡って築き上げてきた思想です。たとえば味噌汁の味のごとくおふくろの味であるとか、畑や野菜の作り方とか、あるいは掃除の仕方とか、永年 親が子に孫に教えてきたものです。

この方が「家を継ぐ」という意味において大きなウエートを占めています。それは、今現在色々な仕事に就いていらっしゃる人のバックボーンとなってその人々を支える目に見えないチカラがあります。この目に見えないチカラが「家系」なのです。以上のように家系を継承する意味は、一方は目に見える形ですので分かりやすいです。一方は目に見えないので何の役にも立たずあってもなくても良いようなものですが、じつはこちらの方が大切な気がします。